

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
共同プロジェクト研究
2025 年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職名		氏 名					
	社会学部・教授		片上 平二郎					
研究課題	「感じ取る身体」の社会理論の展開とその応用可能性——理論・身体・文化の交響から							
研究組織 (研究代表者・研究分担者) 2026年3月現在	所属研究機関・部局・職名		氏 名					
	社会学部 教授		片上 平二郎（研究代表者）					
	社会学部 助教		菅森 朝子					
	社会学部 助教		高山 真					
	文化学園大学 服装学 教授		田中 里尚					
	女子栄養大学 栄養学部 准教授		深田 耕一郎					
	社会情報教育研究センター		佐藤 裕亮					
	教育研究コーディネーター							
	ジェンダーフォーラム 教育研究嘱託		山崎 健太					
	立教大学社会学研究科 博士後期課程1年		長谷川 昌美					
全研究期間	2025年度 ～ 2027年度							
研究経費※ (上段：支出金額) (下段：採択金額)	2025年度		2026年度		2027年度		総計	
	2,997,436	円	0,000,000	円	0,000,000	円	2,997,436	円
	3,000,000		2,000,000		1,000,000		6,000,000	

※1 円単位で記入

研究の概要（200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。）

当該研究の研究目的を含むこと。
【以下、報告書全体について】他の研究分野の委員が評価することも想定し、わかりやすく記載すること。

本プロジェクトは、「感覚」と「情動」に着目し、これまで社会学が前提としてきた人間像を再考し、感覚と情動を身体的に備えた感性的存在としてとらえなおすことで、新たな社会学理論の展開可能性を探るものである。「感じ取る身体」をもつ存在として人間をとらえ、そのような人間によって形づくられる社会空間を捉える理論の構築を目的とする。社会学理論の研究者に加え、福祉・医療社会学、文化社会学・文化批評の研究者が参加し、理論・福祉医療・文化批評の 3 ユニットで構成される本研究は、理論とフィールド、創作的視点が交錯することで、社会学の新たな理論的視座の構築と応用可能性の模索を目指す。

キーワード（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。）

〔社会学理論〕〔感覚〕〔身体〕

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

本研究は、「感覚」および「情動」を媒介とした身体的経験がいかに社会的に共有・伝達されるのかを理論的・実証的に明らかにすることを目的としている。初年度においては、各参加研究者の個別研究を基盤としつつ、それらを横断する問題関心の抽出と理論的枠組の整備を主たる目標として研究を進めた。

・記憶の社会性と身体的運動について

「記憶と身体の社会性」に関しては、高山による福島の被災経験の語り部による記憶伝承に関する研究、山崎による海外演劇祭における性的マイノリティの経験共有の分析、深田による水俣病支援に関わりつつ身体的なパフォーマンスにも関心を寄せていた栗原彬の理論的な研究などを通じて、社会問題や社会的経験が身体的表現を媒介として共有される過程に関する共通の問題関心が明確化された。これらの研究は、言語的記述に還元されない感覚的・情動的経験が、身体的実践(パフォーマンス、支援活動、コミュニティ実践等)を通じて社会的に媒介されるあり方を具体的に示すものであり、本研究の中心的主題に対して一定の経験的知見を蓄積することができたと評価できる。また、菅森による乳がん経験者コミュニティの調査においても、新たにヨガやアロマセラピーといった身体実践を通じた感覚的交流の分析へと研究が展開しつつあり、「身体を通じた経験の共有」という観点の拡張が進んでいる。

理論研究の側面では、長谷川によるミシェル・アンリの身体論に基づく「身体・運動・感覚」への再検討や、片上によるベンヤミンの「身振り」論への着目などが進められており、これらは上記の実証研究と交差することで、新たな理論的着想を生み出している。すなわち、本プロジェクトにおいては、社会調査・文化実践・理論研究が相互に参照しあうことで、「身体的経験の社会的媒介」という主題を多角的に捉える基盤が形成されつつある。この点において、当初目標としていた「理論と実践の往還的検討」は導入段階として概ね達成されていると考えられる。

さらに、フィールド調査の展開として、福島、水俣、鹿児島の特攻隊基地などへの現地訪問も実施され、社会的記憶が身体的・空間的にいかに構成されているかを検討するための基礎的知見が得られた。今後はこれらの調査をさらに深化させることで、「社会的記憶」と「身体的経験」の関係に関する体系的理解の構築が期待される。また、田中によるファッション雑誌におけるポーズ研究の展開も予定されており、「身体表象」や「身振り」といった概念が新たな分析軸として機能する可能性が示されている。

・習慣・日常・反復について

「習慣・日常・反復」といった理論的関心も、本プロジェクトにおける重要な論点として浮上している。長谷川は、ミシェル・アンリの身体論を起点として「習慣」に関する理論的考察を進めており、従来、特異な経験や逸脱的事例に偏りがちであった社会学理論に対して、「日常性」や「反復」といった側面を「感覚・情動」と結びつけて再考する視座を提示しつつある。これは、ピエール・ブルデューのハビトゥス論に代表される既存の「習慣」概念を相対化し、現象学的観点から新たな「習慣の社会学」を構想する試みとして位置づけられる。この理論的展開は、本研究分野における概念的枠組の高度化に寄与するものである。国内外での学会テーマセッションなどのかたちでこの問題関心を広げていきたいと考えている。

研究【経過・成果】の概要 (つづき)

上述の通り、各参加者の問題関心の共有およびそれを基盤としたプロジェクト内での問題設定の発展については、一定の成果を上げているといえる。他方で、これらの成果は現時点では導入段階にとどまっており、本プロジェクトの中核的な問題意識や理論的特徴を、プロジェクト外に対して十分に明瞭な形で提示するには、なお検討の余地が残されている。

今後は、学会発表や公開研究会等を通じた外部発信を積極的に行うことで、外部からの評価や応答を取り込みつつ、本プロジェクトの問題設定および独自性をより明確に定式化していくことを目標とする。こうした発信過程そのものを理論的精緻化の契機と位置づけることで、本プロジェクトの魅力と意義を段階的に可視化していきたい。

・ 国際的展開について

国際的展開についても一定の進展が見られた。韓国との研究者との交流を通じて、世界社会学会議（2027 年光州）に向けた情報共有および合同企画の可能性について検討が行われたほか、韓国の日本文化研究者との合同研究会を通じて、日韓における文化研究の動向に関する比較的視点が得られた。

また、研究代表者によるカナダの研究拠点（コンコルディア大学の感覚研究センターおよびセンス・ラボ、ヨーク大学のセンサリウム）の訪問を通じて、感覚研究・身体研究の国際的動向を把握し、日本における研究状況との差異を踏まえた今後の研究戦略を検討する基盤が形成された。天候の問題があり、結果的にこの訪問は不十分なものになってしまったため、今後、再度の訪問を行うことでさらなる情報収集につとめたい。

以上を総合すると、本年度においては、個別研究の進展を基盤としつつ、「身体的経験の社会的共有」という問題領域に関する共通認識の形成、理論的視点の萌芽的構築、ならびに国内外の研究ネットワークの整備が達成されたといえる。他方で、これらを統合する明確な理論的枠組の定式化については、なお発展途上にある。したがって、本年度の成果は、プロジェクト全体の理論構築に向けた基盤形成段階として位置づけられる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

【論文】

高山真「質的調査と時間の哲学 : 複合災害地域における帰還困難区域のエスノグラフィ (3)」『応用社会学研究』(67), 2025, pp. 59-72.

田中里尚「戦後原宿の「若者の街」イメージの形成 : 原宿の記憶と表象に基づいて」『文化学園大学紀要』(56), 2025, pp. 21-33.

【対談】

宮下太陽, 阿部廣二, 聞き手, 菅森朝子, 小田友理恵, 河村裕樹, 眞崎光司「対談: 質的研究の“うち”と“そと”異分野との協働—互いに異なりながらも新しい視点を手に入れていく」『質的心理学フォーラム』(17), 2025, pp. 71-79.

【書評】

片上平二郎「書評: 岡崎宏樹著『作田啓一 生成の社会学』」『フォーラム現代社会学』(24), 2025, pp. 273-275.

② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

菅森朝子, 青弓社, 『乳がん女性のエスノグラフィ—ピア・サポート/友情/社会への継承』 2026, 220 頁.

片上平二郎, 森話社, 『玉突きとクラクション —軽薄才子のモノログと運動性について—』北村匡平・渡邊大輔編『中平康の全貌』, 2026 年 5 月刊行予定.

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

矢吹康夫, 西倉実季, 高橋幸, 田中里尚『トークセッション「ルッキズム—社会学はこう考える」』東京理科大学, 2025 年 11 月 29 日.

④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

【学会報告】

菅森朝子「がん患者支援におけるオンラインヨガの可能性」日本質的心理学学会第 22 回大会

菅森朝子「がん患者のための「安心安全の第三の場」を構築する実践—ヨガインストラクターの取り組みに着目して」社会デザイン学会 第 20 回年次大会

菅森朝子「ジェンダーの視点から見る、前立腺がん啓発ポスター」第 51 回日本保健医療社会学会大会

佐藤裕亮「作田啓一におけるキリスト像の変遷と〈死〉—『ドストエフスキーの世界』から晩年のノートへ」第 76 回関西社会学学会大会

長谷川昌美「ミシェル・アンリの身体論における「運動-抵抗」図式の理論的射程」第 20 回日本社会学理論学会大会

【批評文】

山崎健太「アデレード視察レポート①: フェスティバルとフリンジ」「アデレード視察レポート②: 観劇プログラムを概観する」「ノープライドなレインボーのラインアップは何を意味するのか—KAAT 神奈川芸術劇場 2025 年度ラインアップから考える」「批評家の国際展開? | Asia TOPA ①～②」など多数, 2025 年、Artscape.